

特集①

智山伝法院二十周年を迎えて【座談会】

智山伝法院は昭和六十二年四月に発足して以来、二十年に及ぶ歴史を積み重ねてきた。

その前身である智山教化研究所は専ら宗団における教化のための研究機関という位置づけであったが、智山伝法院はそれに加えて、人材育成のための教育・研修機関としての任務を負い、さらには現代社会の諸問題にも対応しうる教学の再構築に当たって多面的な研究に携わってきた。殊に「現代」という視点を重視して、前能化の宮坂宥勝初代院長は「真言密教の現代化」という総合研究テーマを提示し、これにもとづくサブ・テーマを年度毎に設定して、その研究に取り組んできた。それは次のとおりである。

「呪術的世界観と科学的世界観」(昭和六十三年度)

「同和問題をめぐって」(平成元年度)

「真言密教の現代化を問う」(平成二年度)

「即身成仏義を読む―私にとっての即身成仏とは」(平成三年度)

「真言密教と習俗」(平成四年度)

「真言密教における儀礼」(平成五年度)

「総合研究の反省と今後の研究のあり方」(平成六年度)

- 「新教化研究会」と三つの「グループ研究会」による「真言密教の現代化の取り組み」（平成七年度）
- 「新教化研究会の成果報告」（平成七年度）
- 「前年度の研究事業活動の継続」（平成八年度）
- 「真言密教の現代化」の研究成果の報告（平成九年度）
- 「仏教の社会的機能」（平成十年度・十一年度）
- 「仏教と呪術」（平成十二年度・十三年度）

これらの研究成果は、『現代密教』や「智山伝法院選書」に結実している。『現代密教』には、毎号、各研究員による個人研究の成果も報告されている。「智山伝法院選書」はこれまで十二冊刊行されている。それは次のとおり。

- 1 「討論 密教の現代化を問う―現代化への提言―」
- 2 「試論 私にとっての即身成仏」
- 3 「常楽会 ―理解と実践のために―」（増補改訂版）
- 4 「インタビュー―「死」を語る」
- 5 「祖先崇拜と仏教」
- 6 「大般若会 ―その成り立ちと意義―」
- 7 「頼瑠 ―その生涯と思想―」

- 8 『灌頂』
- 9 『報恩院流十八道の手引き — 動潮撰「十八道伝授手鑑」訳注—』
- 10 『報恩院流四度次第講義録 — 布施浄慧阿闍梨講義録—』
- 11 『智山の論義 — 伝法大会と冬報恩講—』
- 12 『報恩院流金剛界念誦次第の手引き』

学山たる智山の教学史に燦然と輝く足跡を残した二十年であったと言っても過言ではない。

第二代院長の福田亮成先生は、智山伝法院発足十年目の『現代密教』の巻頭言の冒頭に、「ここに『現代密教』も九冊目を重ねることができた。他の紀要等とちがって、真言宗智山派の宗立研究所の紀要が九冊目を数えることができたのである。すばらしいことではないか。共に喜ぶたい」と記している。宗立大学等の研究機関ではなく、宗門の研究機関において、学術的な紀要を発行している宗派は実はそれほど多くないのである。

智山伝法院発足以来の「真言密教の現代化」という総合テーマは、一貫して今後も追及されなければならない。平成十八年度に吉田宏哲前院長の退任の後、佐藤隆賢現院長のもとで新しい研究体制を発足させた。十九年度には二度の全体会議のほか年内に六回の教授講師会議および個別の研究会議を開催した。研究員は智山専修学院や教学講習会等の各種研修会等にも出講し、再開した伝法院開設講座は現在多くの受講生を集めている。

以下に掲載するのは、現時点において智山伝法院に携わる方々の対談の記録である。諸般の問題点をあえて論文形式にまとめることなくフリートークの座談会のままに掲載することにした。どうか末寺住職並びに教師各位には、ここに提起された問題点を踏まえて今後の伝法院の活動に対して忌憚なきご意見と有益なご助言を賜りた

くお願い申し上げます。

《趣旨説明》

○—本誌のような紀要において、巻頭に座談会を設けることは異例のことだと思いますが、まずその趣旨を説明させていただきます。紀要というのは、「大学・研究所などで定期的に（多くは年一回）出す刊行物」（岩波『国語辞典』）でありまして、本誌『現代密教』も紀要とは銘打ってはいませんが、同様の刊行物として、昭和六十二年に智山伝法院が発足して翌年に第一号が発刊されて以来、今回で第十九号となります。平成十八年度には諸般の事情で休刊を余儀なくされておりましたが、本年は智山伝法院発足より二十年目となり、いわば「成人」すべき時を迎えたこととなります。智山伝法院は前能化の宮坂宥勝猥下が初代院長に就任されて以来、本宗教学の中枢機関として、研究、教育、人材の育成を三本柱として大きな足跡をのこしてきました。宮坂初代院長は、総合テーマとして「真言密教の現代化」を掲げ、各年度において個別の研究テーマを設けて研究体制を敷き、その研究成果が『現代密教』に発表されてきました。総合テーマが「真言密教の現代化」であり、紀要名が「現代密教」であるということは、とりもなおさず一貫して「現代」がキーワードとして設定されていたわけでありまして、この基本方針は今後とも維持されるべきものだと考えます。ここで、「真言密教の現代化」とは何かということをあらためて問い直すと共に、本紀要のあるべき姿についても意見を出し合い、自由な討議の場としたいと考えています。

智山伝法院二十周年を迎えて

★—日本全国の大学やさまざまな研究機関で学術的な紀要を発行しています。しかし、宗門の研究機関で同様の紀要を発行する意義があるだろうかという批判の声が随分前からありました。というのも、紀要に掲載される

論文というのは専門分野の研究成果であり、基本的に一般読者を対象としていません。論文の内容を評価するのは学生や他学科や一般の人ではなく、きわめて限られた専門分野の学者に限られます。本誌は宗外の研究機関にも送られています。本誌が対象としている読者は、全国の寺院住職及び教師や寺庭です。宗門の研究機関が発行する紀要はどうあるべきか、ということだろうと思います。

●—どんな学問分野でも専門的に究めていけば難しくなるのは当然ですが、専門外の一般の人にとって難しいというのは、つまらないというのと同義です。「真言密教の現代化」とは、何よりも先ず真言密教を現代の人にわかりやすいものにするということだろうと思うのです。例えば伝統教学にある「加持身説法」といった言葉をもそのまま使って現代人が何かをどれほど理解できるかということ、おそらく絶望的に不可能です。またそれらは単に言葉の意味の説明ができればよいというものでもなく、これからは「智慧」とか「慈悲」とか「涅槃」とか「菩提」のような仏教の基本的な術語でさえも、仏教の大きな概念的な枠組みじたいを再検討する中でとらえ直されなければならぬでしょうし、その際に明治以降の翻訳語である「観念」とか「真理」とか「実在」といった言葉を単純に仏教用語の翻訳に用いたり、説明に用いたりしてきたことが果たして妥当かということも考えなくてはならないでしょう。

▼—明治時代に福沢諭吉は書いた原稿を発表する前に、自分の家で使っている下女・下男に読ませて意味が分かるかと尋ねていたそうですね。本宗の碩学、故渡邊照宏博士も、不朽の名著といわれる岩波新書の『仏教』『日本の仏教』『お経の話』などの草稿を、高校生のご子息たちに読ませて「わかる」というまで書き直してから発刊したと聞いています。そういう努力が今の学者には足りないのではないのでしょうか。

★—全国の寺院住職や教師の方々に本誌を読んで納得してもらえたかどうか。読んでこれは役に立つと思われた

かどうか。研究者が研究の成果として得た感動を共有してもらえることができたかどうか。一般的に大学などの研究機関の紀要の論文にそのようなことを求めるのは無理だと思われるかも知れませんが、感動を与えられない学問とは何でしょう。まず自分が人の知らなかったことを知って感動し、それを他の人にも感動してもらいたいと思って自分の研究成果を発表するのではないですか。感動のない学問など無意味だと思えますし、それを伝えられない論文は価値がないと思えます。

●—これまで発行された『現代密教』は、決して単なる通常の「紀要」ではなかったと思います。各年度の総合研究テーマに沿った多くの真摯な研究論文は、有意義な示唆と提言に満ちています。そのことは確認しておかなければならないでしょう。ただ、紀要という性格上、どうしても固い学術論文の体裁をとらざるを得ず、それが結果として、寺院住職や教師たちに敬遠される傾向にあったことは否めません。それともう一つ、『現代密教』には、若い研究者の個人研究の発表の場を提供するという役割もありました。

▼—学術論文は、誰もが読んで面白いという「読み物」ではありません。当該分野の現時点での最高水準の内容が要求されます。千人のうち、たとえ一人でもその真価が分かれば、それで十分なのです。それを本当に評価してくれる人が今はいなくても、十年後、あるいは百年後にいるかもしれません。

★—通常の紀要ならそれでもよいと思いますが、本誌の読者はあくまでも寺院住職や教師や寺庭です。その方々に読んでもらうために、宗派の予算を用いて宗内の全寺院に配布されるものです。その方々には、まさしく当該分野の現時点での最高水準の研究内容（知識・情報）を提供するのが本誌の役目ではないでしょうか。教師の向こうには、仏教の基礎知識すらない大勢の檀信徒がいるわけですから、その檀信徒を想定して、教師に読んでもらうという努力を惜しむべきではありません。

●—智山伝法院は宗派の機関なのですから、それは当然でしょう。智山伝法院発足以来の教化の理念と実践と表裏をなす教学の再構築こそ急務の課題だと思います。

★—初代院長の宮坂猥下は、伝法院というものは仏教学について研究するためだけの場所ではなく、教育や伝統の継承といった点に光を当てて教化の原動力となる宗学を再構築しなければならぬとおっしゃっておられました。宗派のシンクタンクとして教化方針の根つことなるものを作らなければならぬということです。

◆—智山伝法院は本来的に学術的研究機関です。ただ、ここでいう「学術」とか「研究」の意味ですが、それは近代的学問と必ずしも軌を一にする必要はないと考えます。

○—それはどういふことでしょう。

◆—明治以降の近代仏教学は、西洋発祥の西洋の学問です。明治以降に日本が取り入れた「文献実証主義」と呼ばれる批判的方法論にもとづく学問の成果は甚大なものがあります。それは現在なお、全国の宗立の大学の本流となっています。よって西洋発祥の学問でない「宗学」は傍流にすぎない。そういう扱いです。だが、それはおかしいのではないか。宗門においては「宗学」が本流で、西洋的な学問のほうこそ傍流とすべきではありませんか。

★—宗門ということにこだわりすぎていませんか。学問は普遍的であるべきです。宗門のための学問など、学問の名に値しません。学問にとって、宗門という枠など関係ありません。

◆—そうでしょうか。普遍的な学問とはなんでしょう。今の仏教学がどうして普遍的だといえるのでしょうか。かつてイギリス人が植民地支配の一環として始めたインド研究の中に仏教学があったわけです。インドを支配するためにはインドの文化を知らなければならぬという目的で始まった研究分野にほかなりません。第二次大

戦後にインドは独立を果たしましたが、それまでインド学、なかんずくヴェーダやウパニシャッド、それにインド仏教の研究は西洋では花形の学問でした。西洋の諸言語の祖語であるギリシヤ語やラテン語と、インドのサンスクリットが同類の言語であるということが分かったからです。それは世紀の大発見でした。印欧語族という概念が生まれ、言語学という学問が生まれたのもそれからのことです。でも、もはやインド学にしても仏教にしても、西洋ではさほど魅力的な学問ではなくなっています。未開の国で発見した驚くべき文化遺産を冷徹な目で観察するが如きの学問的方法論は確かに画期的な研究業績を残しましたが、それを明治時代に取り入れて現在に至る近代仏教学は、現代の日本でも大きな曲がり角にさしかかっているように思われます。仏教学の「仏教」が、一体どれほど現代の日本人に、「なるほど、これは素晴らしいものだ」と感銘を与えるものとなりえているか甚だ疑問です。

●—近代仏教学は、たしかに西洋人の植民地支配の一環として始まった西洋発祥の学問ですが、エジプト学などと同様、純粋な学的対象として西洋各国の大学で研究されるようになりました。明治時代に西欧に派遣された高楠順次郎らは、サンスクリットやパーリ語に基づく文献学的研究を日本にもたらし、漢訳仏典の最高峰である「大正新脩大藏経」の校訂出版と「南伝大藏経」和訳という画期的な大事業を成し遂げました。それらは仏教史に残る偉業だと言つて過言ではありません。今の仏教学は基本的にはその延長線上にあります。

◆—文献学を否定しているわけではありません。文献学は仏教研究の基礎をなすものであり、ある意味でもっと徹底されるべきだと考えます。これまで発刊されている仏典の翻譯にしても決して十分なものだとは言えません。実利とは無縁の純粋な学的好奇心にもとづく地道な文献批判の研究者が減少している昨今の傾向は、むしろ憂うべきことです。問題はそれとは別に、これまでの近代仏教学が、現代の日本仏教、とりわけ寺院仏教と

断絶しているということ。例えば大学などで学んだ仏教学が、寺院ではほとんど役立たないということ。よく聞く話ですし、事実その通りなのです。また、檀信徒から寄せられる様々な相談事や寺院運営に関するところに、近代仏教学はまるで無力です。それどころか、これまで仏教学の立場から、現代日本の寺院仏教は「本来の仏教ではない」として批判の対象にさえなってきました。仏教学をまともな真面目に研究すればするほど、現代の寺院で行っていることがまるで間違っているのではないかと思ってしまう。これでは困るわけです。

●—そうですね。ヨーロッパ人が研究の対象とした仏教は、インドでは滅びた過去のものでした。それを継承している現代の仏教学も、常に仏教を過去のものとしてとらえています。すべての文献は過去のものですから、それも当然でしょう。しかし、仏教は今現に日本では生きているのです。寺院教師にとって仏教は過去のものではなく、今現在のものなのです。仏教を医療に喩えるなら、現場で医療に携わっている医師に対して、仏教学者は病理とか基礎医学を研究する人に相当するでしょうが、病理学者が今現在の医療を無視して、過去の文献ばかりを研究するようなことはありえないでしょう。もちろん文献は重要に違いありませんが、「仏教は今現に生きている」ということに仏教学者は無頓着すぎました。平気で「今の日本仏教は本来の仏教ではない」などと言うのですが、では、その「本来の仏教」はどうしてインドで滅びたのか。

○—インド仏教は十三世紀の初頭にインドの地から姿を消しました。なぜ滅びたのでしょうか。

●—その原因は決して一様ではなかったでしょうが、結果として滅びるべくして滅びた原因の一端が仏教の内部になかったとは言えません。なぜならば外的な直接の要因として、イスラム教徒の侵入とそれに伴う徹底的な破壊が挙げられますが、インドのあらゆる宗教が攻撃を受けたにもかかわらず、ついに復興できなかつたのは仏教だけだったからです。イスラム教徒への恨み言は一切残さず、あたかも自らが最終的に到達した思想を封

印するが如く、インド仏教は消滅しました。かくしてインド仏教は完全に過去のものとなったのです。

◆—生きた宗教としてのインド仏教を私たちが知るすべは永遠にないわけですね。

●—ところが、文献学はインド仏教をまるで見てきたように説明するのです。文献学という学問は文献が語っている内容を明らかにすることであって、それ以上のものではないはずなのに。例えば今現在の日本という国の様子を千年後の人が、かりに唯一残った日本国憲法という文献だけを手がかりにして理解することができるとしようか。絶対にできないと断言できます。千年後の人が日本国憲法の意味を知ることが可能でしょう。しかし、それと千年前の日本の情勢を知ることとは全く別の問題です。同様に、文献学によって解るインド仏教とは、経典が語る内容だけなのです。それがどのようなようにして、どんなところで説かれ、あるいは信じられ、どのような宗教的実践の形態があったか、すべては推測の域を出ません。そうした生きた宗教としてのインド仏教については、私たちは何も知らないと言わなければならないのです。

◆—私は、現在の文献学はもっと徹底されなければならないと考えています。万が一にも文献学を蔑ろにして不要だというような暴論は断固打破しなければなりません。それと同時に、文献学の限界について十分に心得ていなければならないということですね。

●—西洋の学者は仏教を信仰の立場から研究してきたものではもちろんありません。世界各地の民俗宗教を研究する場合と同様、仏教をあくまでも一つの客観的な対象として、その外部から観察して研究するという方法が近代仏教の基本にあります。ところが、日本では明治以降、ほとんどの仏教学者は仏教の内部に身を置きながら仏教学に携わってきたわけです。それは日本仏教という伝統が生きている日本において避けられないことでした。仏教を客観的な対象としてみる視点と、仏教の内部に身を置く視点とはおのずから異なります。喩えて

言う料理のレシピ（作り方）を読んで実際につくってみるかどうかということでしょう。

◆それは分かりやすい喩えですね。いかなる料理にもレシピが必要です。西洋の仏教学者は、過去のレシピ（経典）の完全な復元に興味を示しただけで、実際に自分で料理をして味わってみようとは思いませんでした。問題は、日本の仏教学者がその影響を受けて、本来は料理人としてレシピの研究を始めたはずなのに、いつのまにか外国料理のレシピの研究が本業になってしまったことです。その結果、日本の料理人として腕を磨くことをすっかり忘れてしまったのです。

○—密教の現代化とはどういうことか、ということでした。

●—密教は現代社会に生きていないのではないか、という反省から始まったテーマだったと思います。今にして思えば隔世の感がありますが、そもそも、かつて真言宗は教化ということを全然考えたことがありませんでした。総本山智積院は伝法の拠点としての修行道場に徹していたのです。「賽銭無用」と言い、諸堂のどこにも賽銭箱がなかったほどです。昭和四十一年に智積院会館が竣工し、昭和四十三年に智山教化研究所が発足、その翌年に「つくしあい運動」が提唱された頃から、本宗は教化宗団としての地歩を固め始めたのです。昭和五十九年の「弘法大師千五十年御遠忌奉修」のころ一つのピークを迎えたように思われます。

○—当時、新興宗教の擡頭に危惧を覚えた伝統仏教の各宗団が教化活動のスローガンを打ち出しました。本宗では「つくしあい運動」、豊山派では「合掌運動」「光明真言運動」、天台宗では「一隅を照らす運動」、浄土宗では「おてつき運動」、日蓮宗では「護法運動」、浄土真宗では「同朋運動」、等々がありました。現在なお同じスローガンを掲げて活動を続けている宗団もありますが、総体として全国に周知されたとは言えません。

●—本宗の場合、それが宗団として教化を重視する姿勢を示す発端となった意義は大きいと思いますし、様々な面で一定の成果を挙げたことは紛れもない事実ですが、結局は全宗派的な浸透を見せることなく、誰が言うともなく「不発に終わった」「挫折した」との声なき声と共に今では人々の記憶から消え去ろうとしています。

◆—宗派全体としてはいくらスローガンを掲げても活動する人がいなければ話になりません。教化の裏付けとなる学術的な基礎研究の必要性が叫ばれ、加えて人材の養成を旗印に、それまでの機構・組織を改め、智山伝法院が発足したのは昭和六十二年のことでした。よく学山智山と言われますが、智山伝法院がその一端ないし中樞を担うものであることは確かです。しかし、果たして現在の総本山は学問を中心とした山であると言えるでしょうか。総本山が従来の伝法を主体とする修行の道場という性格には変わりはありませんが、今は学山というより教化を主体とした教化宗団としての姿勢が色濃く感じられます。少なくとも賽銭無用とっていた時代から大きく変貌を遂げているのは事実です。そういう中で、これはあらゆる人文学についてもいえることです。学問の内容と方法論が大きく問われている時代なのだと思います。

▲—密教の現代化というのは、単に密教を現代風に変えていくということではないでしょう。伝統は基本的に變えてはいけないものだと思うのです。時代と共に世相がどのように変わっても本質的に変わらないし、變えてはならないものがある。それを現代にどう伝えるかということが現代化ということではないでしょうか。

▽—これまで密教の現代化について色々と議論が交わされてきましたが、それは宗団の内部の議論に止まっています、外に向かっているようには思われません。密教の現代化とは、密教を現代に合わせて変化させていくということではなく、現代の世相の変化に対して密教の伝統を受けつぐ私たちがどう対応していくかという問題ではないかと思うのです。具体的な問題として、例えば公開の講座等で密教の実践に関することや特に真言や

梵字を教えるような場合、一般の受講者にどこまで教えてよいかといつも考えます。

■—チベットでは、灌頂が世間の灌頂（公開）と、出世間の灌頂（非公開）との二つに分かれています。聖なる空間を保ちつつも、一般の人にも公開するシステムが構築されています。

●—本宗でも、灌頂に関しては在家者を対象とした結縁灌頂と、真言僧侶の伝法灌頂と、二つあります。

■—最近のチベットの場合、法要の際に僧侶が法衣を着ず、法要中であっても携帯電話で話し出すようなことがあつたりして、神聖さが失われている面もあります。日本でも、とりあえず経が読めればよい、ひととおりの法要ができればよい、極端に言えば、真言や所作の意味など分からなくてもよいという風潮を感じます。僧侶のあり方というものについて考え直さなければならぬという気がします。

□—ネパールでは旧来の仏教が衰退しています。なぜなら、家系で僧侶になれるかが決まっっていて、僧侶になる道が一般に開かれていないからです。それに加えて、最近の僧侶は法要の際にも衣を着ないで、形式を重んじていないことが問題です。形式の中に荘厳さがあり、信徒の信仰を集めるということが疎んじられているのです。

▲—宗教における「形式」ということは、実はとても重要なことなのです。種々の儀礼にしても、あるいは美術や音楽にしても、礼拝の仕方や唱える言葉や服装や、歩き方に至るまで決まった形式があります。どんな宗教であろうと、宗教建築とそうでないものとはすぐに判別がつかます。形式のない宗教はありえません。仏教が生きているというのとは、仏教の形式が生きているということなのです。形式が生きているからこそ、信仰もありえると言っても過言ではありません。インド仏教の中観とか唯識とか如来蔵といった思想にしても、仏教が宗教として成立するためには、その思想だけでは不十分で、そこに何らかの瞑想法なり実践的儀礼的な形式

があり、そこで初めて人々の信仰を集めたはずなのです。

●—仏教には、思想と信仰の二つの面があるわけですね。信仰の面がなければ、宗教たりえませんが、観とか唯識といった思想があるからこそ、仏教には宗教としての深みというか、奥行きがあり、確たる意義があるわけです。それに加えて、ここで形式ということが問題となりました。それは文字だけを扱う文献学では問題にもならないことですが、いかなる宗教においても、実際の現場では形式が重要です。それを蔑ろにしてしまつてはなりません、肝心なことは、内容の伴わない形式は空虚の上ないということです。

▲—華道とか茶道、あるいは歌舞伎や狂言や謡曲などの伝統芸能の世界でも、形式を非常に重んじます。茶道の初心者に、いきなり「茶の心とは何か」などと教えるようなことはしません。まず型から入るわけです。やがてその形式の中に込められた内容というか思想というか人としての生き方を学んでゆくわけです。

▽—近代というのは、大雑把に言つて、旧来のあらゆる形式からの脱皮を計り、いわゆる「形式ばったこと」を拒絶し破壊して、内容だけを重視し、ひたすら合理性や利便性や快適性を求めてきた時代ではなかったでしょうか。形より中身が大切だという言い分は説得力があるものでした。あらゆる形式は不自由で窮屈で古くさいものといった負のイメージがつきまといましました。そうしたイメージを振り切ろうとこれまであらゆる形式を破壊してきた結果、今やむき出しの中身は行き場を失つてしまつていく状況です。形すなわち器（うつわ）があつてこそその中身だということに、ようやく現代人は気づき始めているのではないでしょうか。

▲—華道とか茶道や伝統芸能の世界では、そうした形式を伝える家元制度によって成り立っています。家元制度というのは日本で生まれた伝統文化を守るための最高のシステムなのです。これには模範があつて、それはほかでもなく日本の伝統仏教です。江戸時代に確立した本末制度と寺檀関係は、日本のあらゆる伝統文化の範と

なる到達点であったと正当に評価されるべきものでした。もしこれらの一切をなくしていれば世界に誇りうる日本の文化の何が残りえたことでしよう。

□—形式的なものは、むしろとても大切だと思いますし、今の時代だからこそしっかりと守っていかなければならないと思います。形という器がなければ中身もない。当たり前のことです。そして、その上で中身こそが重要だというべきなのです。器よりも中身のほうが重要なのは、これも言うまでもないことです。

○—現代社会の諸問題にどう対応するかということが、「密教の現代化」のひとつのテーマになっていたと思うのですが、これについてはいかがでしょうか。例えば、政治や教育や環境、臓器移植、閣僚の靖国神社参拝、憲法、同和問題、自衛隊のイラク派遣、あるいは少子化とか年金問題など無数にあります。本宗でも、これらの問題に伝法院でいくつか取り組んできたことはあります。

●—現代社会の諸問題と言っても、今現在たまたまマスコミが取り上げている問題に対応するのが、密教の現代化ということになるのでしょうか。

○—現代の様々な社会問題について寺院教師が檀信徒から意見を求められることがあると思うのです。そのような場合を想定して、これまで伝法院では幾つかの社会問題について取り組んできましたし、発言なり提言もしてきました。しかし、宗派としての統一見解を出すところまでいっていません。一部の伝統教団では非常に積極的に様々な社会問題に取り組み、活動を展開しているところもありますが、これまで本宗ではそうした点では控えめであったと思います。

▲—伝統的な教義は当然のことながら現代の諸問題を想定していません。だから現代の諸問題に対応できるよう

な教学の再構築をしなければならぬという議論になりやすいのですが、ことはそう簡単ではなく、仏教では原則的に世間のあらゆる問題は単純にすべて「迷妄である」ということになるのです。伝統的な教義は現代の諸問題を想定していないどころか、いつの時代の世間のいかなる事象も問題視すらしていないのです。

◆—現代における様々な問題を突き詰めてゆくと、どこかの局面でイデオロギー的な色分けがなされてしまいません。例えば「チベット問題」とか「東トルキスタン問題」などはマスコミが報じることはほとんどありませんが、世界の中で日本だけが報じないということ自体が一つのイデオロギーに与していることになり、それが現在進行中の悲惨な宗教的迫害であると問題視するだけで困る立場もどこかにあるわけです。同和問題や環境問題や政教分離問題や教育制度や学校教科書の問題など、あるいは個々の事件や訴訟などの諸問題のどれを取り上げても、政治的もしくはイデオロギー的立場から完全に中立ではいられません。何らかの問題に対して「仏教者としてこう考える」というアピールもよく見かけますが、どんなに公平を装っていても、ある一部のイデオロギーの立場から利用されているとしか思えない場合が多いわけです。

▲—だからといって私たちは現代の諸問題にまったく無関心でいてよいかというと、そんなことは許されないでしょう。私たちが今生きている現代という世の中を無視して歩むべき道はどこにもありませんし、世間のあらゆる問題は迷妄であるとしても、私たちはそのただ中に生きています。宗団の立場が何であれ、結局のところ、現代社会のあらゆる局面で問われるのは一人一人の見識にほかならないでしょう。

○—何らかの結論を導くためではなく、様々な意見を出し合って宗内外の多くの方々と問題点を共有し、今後共に考えていく契機にしたいということから始まった座談会でした。限られた時間で意見を出し尽くしたとは言えませんが、いくつかの重要な問題提起ができたかと思っています。ありがとうございました。